

聖誕節 説教

救い主のしるし

＜ルカによる福音書2:1~14＞



朱文洪牧師（小倉教会）

文豪ドストエフスキイは「奇跡は聖書そのものである」と言いました。人を変えさせる力があるからだ、と。救い主の目撃者・証人者によって書かれた最初の福音書は「神の子・イエス・キリストの福音の初め」から始まります。当時「神の子・救い主」は『皇帝』に充てる名称で、皇帝に後継者が生まれた知らせが「福音・良き知らせ」がありました。皇帝崇拜の価値観に真っ向から対峙したのが福音書でした。

ルカ福音書は、ローマ帝国支配下の人々に隠喩の言葉遣いで神の子の降誕を伝えます。今でもユダヤ人は、本文の物語りから数千年に渡る過酷な仕打ちを思い出し涙すると言われます。皇帝の戸籍登録令は支配者からのやがて来る税金と徴兵・徴用に繋がる災いの知らせであり、出産直前の妊婦も従わなければならぬ慈悲な権力の命令でした。

ルカによる聖誕の物語りは一不条理に服従するしかない人が祖先の故郷に来ても居場所が無く、家畜小屋に身を寄せる—現代にも通じる状況を描き出しています。皇帝と乳飲み子、宮殿と家畜の小屋、勅令とみ使いの対比は見事です。飼い葉桶の乳飲み子のように無力で、助けなしには生きられない弱い存在に、やがて餌食とされる名もない、無に等しい存在に「救い主」のしるしがありますよ、と語り掛けます。

マタイ福音は東の賢者が「メシヤの星」に導かれて旅し、拝んでからは別の道で帰ったと伝えています。救い主に出会った人はまったく違う道に導かれるようになると暗示されます。（マタイ福音書2:12）飼い葉の乳飲み子からメシヤの星を見つけ、導かれる人は何んと幸いなことでしょう。ここに聖誕の喜び、祝いの深い意味があるのではないでしょうか。

沖縄の伊江島にある教会は小さな十字架がなければ古家に見える会堂でした。

九州教区からの十数人と地域の人で満席になる会堂、玄関先で靴の整理をしたのは老いた人でした。普段着で集会の下働きに従っていました。その方が主任牧師だったと分かったのは帰り道。「沖縄のカンジ」と呼ばれた阿波根昌鴻さんと共に「命」の尊さを訴え続けた平和運動家でした。数年後、彼の訃報に接した際には大切な人を喪った悲しみが込みあげました。握手も交流も無かった方なのに。あの一時の光景が十数年たっても忘れられません。

中部地方会に居た頃、休暇の旅路に関西の在日大韓教会に立

ち寄りました。主日礼拝出席者は牧師夫妻のみでした。戦前戦後多くの同胞が住んでいましたが段々と過疎化していく町と歴史の番人に見えました。微笑む牧師任の日に焼けた顔は農夫そのものでした。敷地の畑でカボチャや野菜を栽培していて、これらが私の仲間だと言っていました。

30歳で瀬戸内海をフェリーで渡って赴いた初の牧会地は街から隔離された寂れた町でした。

礼拝は牧師家族だけの時が頻繁にあり、主日を迎えるのが負担となりました。何も無いような、起こらないような、不安に駆られる日々の中、関西にも似てる教会があると知りました。何んとなく慰めと励ましを受けたような気がして手紙を出しました。先方からは庭で収穫したカボチャを送ってくれました。数年も過ぎた後その時の思いを伝えることができました。「牧師任ご夫婦の孤軍奮闘の光が遠くまで及んだ事を——」

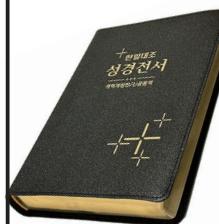
九州の働きで強制連行・労働犠牲者のお墓、追悼碑と関わったことは幸いでした。時の支配者によって移住させられ骨になった人、無名・不明遺骨と化した方々を覚えること、証言すること、実態を記録する人の出会いがありました。無に等しい存在に目覚めることは、インマヌエルの主を親しく臨むことでした。

私は、基督教洗礼以前に、反共、資本主義、家父長的家族制度の洗礼を受けていました。この事実に気づかされたのは「在日の現場」でした。香川県で在日2世の男性は社会から拒絶された重荷を語り、キリスト教会へ、牧師へ、鋭く問い合わせてきました。あなたは伝道の目的で人と会う、自分の牙城で精神的勝利に酔っているのではないか、と。総連系の人を避け、天皇制日本に委縮され、報われない牧会の日々に苛立ち、落ち込み、苦しんだのは世の洗礼の力に捕らわれていたからでした。

40年間の「在日の旅路」を経て、聖誕の光がより低いところから輝くのが見えるようになった気がします。御導きで歩き回された四国、中部、九州の教会事情は元気づけられるような華々しさは乏しく、自分の心身も衰えて参りました。暗い現実ではありますが主のご臨在を感じ、明日に期待感が増す聖誕節です。

（今日、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主・メシアである。布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子、これがあなたがたへのしるしである）

韓日対照聖書販売



各ページの左に韓国語（改革改訳）、右に日本語（新共同訳）が掲載されています。

- A5版変型・1760ページ、革製
- 価格：4,000円（消費税・送料込）

※お求めは総会事務所へ

韓日対照讃頌歌販売



韓国的新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

- B6版変型・1483ページ
- 価格：2,500円（消費税・送料込）

※お求めは総会事務所へ



異端宗教対策セミナー開催 斎藤篤牧師を講師にカルト問題学ぶ

去る11月15日（金）午後7時半から9時頃まで宣教委員会主催の異端宗教対策セミナーがオンラインで開催され、52人が参加した。

今回は日本基督教団仙台宮城野教会の牧師である斎藤篤先生を講師として迎え、日本社会において大きな社会的イシューとなっている異端・カルト問題を学ぶ機会を設けた。

斎藤篤牧師は青少年の時、エホバの証人に関わった経験もあり、証しを中心に話されると予想したが、異端とカルトの言葉の基本的な定義から旧統一協会により起こった社会問題や日本政府による法的対応等、幅広い話しを聞くことが出来た。特に、私たちが「異端」と「カルト」を混同していることや異端宗教2世問題、「政治カルト」など、わかりやすい語り口を通して教えてくれた。

もっとも印象に残ったのは、斎藤牧師自身がエホバの証人を抜け出す決心をした動機となったのが青少年の時代友たちの家に遊びに行った時、その友たちの家はクリスチヤン家庭であって、友たちのお母さんから「あなたのために祈るよ」と言う言葉を思い起こし、教会へ行き出した、ということである。そして教会に通い始め、クリスチヤンとして溶け込むまで長い時間がかかったようだが、教会は嫌な感じを与えず、ずっと待ってくれたそうである。この話から私たちは異端やカルト集団から抜け出そうとしている人に対して、どのように接すればいいのか良いヒントを与えられたような気がする。

（報告：委員長 趙永哲牧師）



「宣教協約」40周年研修会 日本基督教団近隣諸教区と協同で

在日大韓基督教会と日本基督教団「宣教協約」40周年記念集会は、9月16日、大阪教会で行われたことに続き、関東地方会としては近隣の日本基督教団諸教区との交流の40周年を記念とし、さる11月11日～12日に日光オーリーブの里で1泊研修会を行った。

関東地方会から金容昭地方会長をはじめ11名、日本基督教団から6つの教区（奥羽、東北、関東、東京、西東京、神奈川）から12名、合計23名が集い、礼拝、講演、発題などを通して「協約」の実質的な協力や交流の歴史を踏まえ思起ことされた。

講演は金迅野牧師（関東地方会副会長、横須賀教会）が「暴力の世界で柔軟に生きる～イエスの和解の身振りに学ぶ～」という題でヘイト、戦争、障がい者無差別殺害などが「多文化共生」の名のもとで起きていることとヘイトの原因分析と「連累implication」に

ついて問い合わせ、(1)「聞く」ことをめぐって（イエスに聞く力から考える）、(2)「怒り」行方（イエスの「共感」について、聖書のみことばから考える）、(3)「和解」をめぐって～復活のイエスに「出会い」ということについて～、深く考えることができた。

発題には、金柄鎬牧師の基調報告をはじめ、日本基督教団の近隣諸教区からそれぞれ教区と関東地方会諸教会との交流の事例が出された。かつて在日大韓基督教会は教会のない県庁所在地に開拓伝道をするとの方針で開拓された「仙台教会」（宮城県）、「浦和（大宮）教会」（埼玉県）、「水戸教会」（茨城県）、「三沢教会」（青森県）、「新潟教会」（新潟県）、「つくば東京教会」（茨城県）、「日立教会」（茨城県）、「山形ウリ教会」（山形県）、「北上ベテル伝道所」（岩手県）、「郡山伝道所」（福島県）などの地域に教会が設立されたのは日本基督教団の諸教区からの積極的な協力と支援によって実ったことである。

関東地方会と諸教区との交流はコロナなどで10年ほど実行できなかったが、今回の集いによって年に1回は行うことを話し合った。

（報告者：金柄鎬牧師）



関西地方会 アシュラム祈祷修養会を開催 鄭然元牧師（大阪教会）を講師に

関西地方会伝道部主催の2024年アシュラム祈祷修養会が、「限界を乗り越える信仰と祈り」（列王記下20章1～3節）を主題に、11月3日（第1主日）午後3時から午後5時まで大阪北部教会（趙永哲牧師担任）で開催され、62名が集った。

今回のアシュラム祈祷修養会は、伝道部長の趙永哲牧師（大阪北部教会）の「挨拶」で始まり、金鐘賢牧師（浪速教会）の「開会の祈り」、京都教会青年会讃美チームによる「讃美的時間」、そして1983年から日本に宣教師として派遣され、長い間KCCJのために奉仕をし、11月10日引退される講師の鄭然元牧師（大阪教会）による「御言葉の時間」として主題についてのメッセージがあった。

その後、姜宇烈牧師（奈良教会）による「讃美的時間」、朴栄子牧師（豊中第一復興教会）による「証しの時間」があり、引き続いて、朴時永牧師（大阪築港教会）の司会による共に「祈りの時間」があった。今回は、3つの祈りの課題を取り上げ、①開拓伝道・教会成長のために（裴貞愛牧師・枚岡教会）、②青年・子どもたちのために（韓宣榮牧師・大阪教会）、③戦争・自然災害を覚えて（宋南鉉牧師・大阪第一教会）について皆で声を合わせて祈りをささげた。

最後に、地方会長の朴栄子牧師の「閉会の祈り」をもって、今回のアシュラム祈祷修養会を終えた。

（報告：伝道部長 趙永哲牧師）



韓・在日宣教協議会開催 30年間の宣教協議会の歩み振り返り

1995年、全国教会女性連合会とイエ長女伝道会全国連合会、基監女宣教会全国連合会、基長女信徒会全国連合会、韓国教会女性連合会がイエス・キリストの愛の中で連帯し、宣教・民族・女性・平和・次世代リーダー養成などを目的として本協議会を結成し、去る2024年10月28日（月）～30日（水）ソウルにて第15回韓・在日宣教協議会を開催した。

在日側10名、韓国側36名が参加。開会では金敬恩会長（韓国教会女性連合会）より5年ぶりに宣教協議会が開催できる喜びと感謝の挨拶があり、崔素英牧師（韓国教会女性連合会前総務）より主題の「打ち碎く女性、目覚める教会！」という題目で説教があった。

礼拝後には30年間の宣教協議会の歩みを振り返り、在日・韓国側から現状報告・問題提起・発題があり、その後グループ討論を行った。協議会中には、韓国基督教長老会女信徒会全国連合会、大韓イエス教長老会女伝道会全国連合会、韓国基督教教会協議会（NCCK）の事務所を訪問、フィールドワークとして戦争と女性人権博物館、正義記憶連帯に訪問、そして水曜デモに参加した。

各教団訪問では質疑応答が活発に行われ、生活する環境は違っても互いが一つとなり助け合い、平和の実現、教会と地域社会に用いられる人材を育成、新しい時代を拓く神の働き人、教会女性でありたいと思う。最終日の閉会礼拝では在日側が特別讃美をささげ、曹恩注牧師（宇部教会）より「幸いな者」という題目で説教がなされた。

礼拝後、韓・在日宣教協議文を朗読し決議事項を承認した。

（報告：西部女性会会長・梁律子）



日本キリスト教会と宣教協力委 早尾貴紀 教授を講師に特別講演

第2024年11月21日（木）KCCJ東京教会を会場に日本キリスト教会（CCJ）との宣教協力委員会を開催した。

委員会を始める前に午後1時～3時まで第一部として特別講演会（対面・オンライン併用）を行った。『植民地主義と人種主義の下でイスラエルと日本の交差を考える』～「ディアスポラ」的生の視点から～という主題、講師：早尾貴紀 教授（東京経済大学）から、歴史的な観点からイスラエルとパレスチナ自治区がなぜ現在のような状況になったのか。それはヨーロッパにおけるユダヤ人迫害と帝国主義による植民地支配が大きく影響を及ぼしていること。またそれは同時にアジアにおける日本の大陸侵略とも関係しているという指摘があった。私たちキリスト者もイスラエルにおける現状を信仰的な先入観にとらわれるところなく、歴史の中でしっかりと捉え直す必要があると感じた。

午後3時30分～5時30分までは第二部の宣教協力委員会では、祈祷を梁栄友 牧師（総会長・武庫川教会）が捧げ、中家契

CCAアジア神学者会議開催 神学的課題に応答する重要性強調

去る10月24日から29日までマレーシア・クアランプールにて、アジアキリスト教協議会（CCA）の「第10回アジア神学者会議（CATS-X）」が開催された。CATSは、アジアが直面する諸課題に対しての神学的分析、共有化を目的としている。1997年に韓国で開始され、1999年にはインド・バンガロール、2001年にはインドネシア・ジョグジャカルタ、2003年にはタイ・チェンマイ、2006年には香港で会議が開催されている。

記念すべき第10回を迎えた今会議では、CATS発足とニカイア公会議1700年記念式典がマレーシア福音ルーテル教会にて開かれた。

今会議は、「ニケアの響き：信仰の永続と一致の受容（'Echoes of Nicaea: Enduring Faith and Embracing Unity'）」をテーマに、講演と細部に分けたテーマに沿った発表を中心に構成された。100名以上のアジア神学者とエキュメニカル指導者が参加した今会議は、活発な神学的議論と交流が行われる場となった。

最初の講演にてジャヤギラン・セバスチャン博士は、分断された世界の中で、アジア教会の多様な歴史、神学、典礼と教会論的理解を通じて、現在の神学的課題に応答する重要性を強調した。続く発題では「教会論の一致性」、「生態系中心の連帯」、「サイバー的連合」と「信仰の永続と一致の受容：アジアのエキュメニカル対応」であった。

6日間のすべての日程が終った後、CATSは声明文を通じて、アジア教会の歴史、疎外された現実、環境問題、人工知能、教会の未来、移民の現実、アジア教会の生活などを含む様々な現実的な問題をニケア信条を通して再び見る必要があることを強調した。

（報告：鄭詩温牧師）



介 牧師（CCJ大会議長・仙台黒松教会）からメッセージがあった。その後、宣教協力委員会がもたれ両教団の報告後、これから両教団における宣教協力の在り方において自由に意見を語り合った。三好明牧師（CCJ・志木北教会）による閉会祈祷で終えた。参加者は対面25名、オンライン20名であった。



〈年末年始業務案内〉

総会事務局は年末年始下記の期間業務を休業いたします。
《2024年12月24日～2025年1月3日》

在日大韓教会関東地方会と日本基督教団東日本諸教区との記念研修会に参加して—「イエスはどこに？ 誰と？」—

片岡謁也 牧師 (日本基督教団東北教区 若松栄町教会)

2024年10月11日～12日、深秋の日光オリーブの里で在日大韓教会（以下KCCJ）関東地方会と日本基督教団（以下UCCJ）東日本諸教区との記念研修会が開催された。KCCJからは11名、UCCJからは12名の参加があり紅葉の日光で深い学びと交流の時を意味深く味わった。

同年9月16日、KCCJ大阪教会で両教会の「協約」締結40周年記念集会が開催され、それに呼応する形で東日本にある両教会も交流を深めよう、とKCCJ関東地方会の呼び掛けで今回の研修会が実現した。この研修会開催にあたりKCCJが日本側の参加費滞在費を全て負担してくださったことに、心から感謝する次第である。東北教区からの出席者2名は会津地方で奉職しており、会津から南下すること100キロ、晴天の道のりを紅葉を楽しみながら日光まで往復した。

UCCJからは奥羽、東北、関東、東京、西東京、神奈川教区から教区議長や関係委員の出席があり、それぞれの教区から交流の現状と課題、個人的な関わりなどが報告された。諸教区にある両教会の交流に濃淡はあるものの、いずれも総会への相互来賓招待、牧師就任式や教師研修会への参加など、コロナ禍を除いて有機的交流がなされてきたことが判る。

主題講演は「暴力の世界で柔軟に生きる～イエスの和解の身振りに学ぶ～」と題して金迅野牧師（横須賀教会／関東地方会副会長）が担当くださった。ご自身の出自から成長の過程で感じ考察したこと、多様な働きを担う原動力とこの国に溢れる課題……。一つひとつの言葉に参加者一同鋭く問われる。折しもこの三日前、筆者の妻片岡輝美が金迅野さんの立教大学大学院ゼミで「フクシマからのメッセージ」を担当したばかり。キリスト者による人権、正義や平和への取り組みは、まさに両教会に連なる信仰の友に通底する課題であると繰り

返し思い知らされる。

筆者にとって忘れられない記憶のひとつは、やはり東日本大震災にまつわることだ。職責上、主日礼拝以外は仙台市に開設した「被災者支援センターエマオ」に常駐していたが、いち早くこの當みに反応してくださったのがKCCJの皆さんだ。祈りはもちろん財政的支援やボランティア・ワーカーを支える具体的働きを担ってくださった。

東北教区の報告の際、筆者が語ったのは神学生時代のある友人との出会いの物語である。KCCJの牧師になったその友人によって、多様な課題に向き合うことへと促された。この国に生かされている少数者（！）の傍らに立つことの意味を自ら問い合わせることによって、現在の筆者自らの「現場」がある。被差別部落、オキナワ、アイヌ、性的少数者、外国人労働者、そしてフクシマ……。

「イエスは、どこに、誰と、どのように生きておられるのか？」との根源的な問いは、これからも両教会への共通の問い合わせであろうと確信する。その問い合わせ共に向き合うことのなかに共働の実質化がなされるだろう。



川崎教会 襄重度名誉長老が召天 民族差別撤廃運動の先頭に立ち尽力



川崎教会の襄重度名誉長老が、2024年11月23日、天に召され、金迅野牧師の司式によって11月30日午前11時から告別式が行われた。享年80歳。

故・襄重度名誉長老は、1944年日本の東京で生まれ、1976年李仁夏牧師より受洗されてから1986年長老として昇立され、生涯川崎教会に仕えた。

故人は1974年在日韓国人問題研究所（RAIK）創設時の主事、その後所長として民族差別撤廃運動の先頭に立ち、川崎ふれあい館の館長、青丘社理事長などを歴任した。

襄重度長老を悼む

川崎教会の襄重度名誉長老が11月23日深夜、ご自宅で召天されました。

襄長老は、1974年に総会の直属機関として設立されたRAIK（在日韓国人問題研究所）の主事として、李仁夏牧師と共に民族差別撤廃運動、指紋拒否運動の先頭に立ち、また1987年外キ協結成時にはその事務局を担いました。

長年の地域運動の果実として1988年春、公設民営として川崎市ふれあい館が桜本に建てられたとき、川崎教会を母体とする「社会福祉法人青丘社」が運営を担うことになり、襄長老はその館長として赴任され、多文化共生の街づくりに長年尽力されてきました。また、外キ協をはじめ日本の諸教会が毎月のようにふれあい館を訪れ、在日韓国・朝鮮人の歴史と現在について襄長老から話をうかがう「研修コース」もなっていました。

襄長老はこの1～2年間、苦しい闘病生活を送っていましたが、子どもたちに見守られて静かに旅立ちました。日本社会の不条理に敢然と立ち向かった在日二世として、日本人との和解と共生を希求するキリスト者として、襄長老の言葉は、在日同胞の青年たち、多くの私たち日本人にいつまでも記憶に残されていくでしょう。佐藤信行（RAIK顧問）

2025年度 牧師・伝道師考試及び宣教師加入考試

「2025年度牧師・伝道師考試および宣教師加入考試」を以下のように実施します。考試の詳細と請願書については総会のウェブサイト（<http://kccj.jp>）をご参照ください。

一、日 時：2025年3月10日（月）

- ・10:00～ オリエンテーション
- ・10:30～17:00 筆記試験

・17:00～ 面接

*試験終了後、順次面接を行います。

二、場 所：在日韓国基督教会館（KCC）

三、申請（書類提出）：2025年2月10日（月）必着

四、提出先：総会事務局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-55

電話番号 (03)3202-5398 FAX (03)3202-4977

神学考試委員会

委員長 金聖孝、書記 朴栄子

（問い合わせ TEL 090-6677-3492）